

2008年現在、日本語でテキストを書くということは何を意味するのか。書くことがその書くものに成っていく過程であるのであれば、日本語で書くということは少なくとも日本語で表象されうる範囲内の事象へと書き手が生成変化していくことを意味する。それは、英語が現代世界の主流言語であるという現状確認と、ある種の締念に似た認識に対して、意図するとせざるを問わず、批評的な行為として位置づけることができる。それは、集約の後には拡散がある、という巨視的な観念論を振りかざすことなく、現在私たちが直面する諸々の状況と照合しても有効である。

「近代」「ポスト・モダン」、その後にある状況をここでは仮に「プロ・モダン」と呼んでみる。「pro-」というラテン語の接頭辞は、「目の前にある」「先行して」「-として」「-のために」といった義を持っている。モダニズムにおいて自己定義がすべてに先行し、自家撞着を引き起こした結果、ポスト・モダンの乱視的状况が続いたことを想い、そのうえで「再帰的に現代の現代性を把握しようとするのであれば、ある形式への固定化でもなく、ましてや定義からの逃走でもない方法を探らねばならない。

モダニズムの標榜した自己言及性は、普遍的な自己言及性が存在するという大きな誤りに基づいている点において、偽の自己言及性でしかなかった。ポスト・モダニズムの決定不可能性もまた、存在の揺らぎと不確定性を足枷にした結果、依然として愚行や惨劇が決定され続ける現実と

乖離してしまった。こうした観点から見ると、双方とも遠視的な自己言及性と近視的な不確定性という、一方向への偏重によって共通している。ここからあぶり出される現在の私たちの問題は、視力の矯正であり、それは生命論の正しい把握を要請すると考える。

「目の前にある現在性」、これはトートロジックに見える命題だ。しかし、それは生命が孕む、一見トートロジックに見える構造と同様の再帰性を示唆している。例えば、細胞膜の形成は次のように表記できる。「膜は細胞の境界を既定する/細胞の構成素は膜を構成する」、と。ここでは膜の形成と細胞内の力学系が、構造的にカップリングして、ひとつの作動システムとして、あくまでその流れによって/流れのなかに(par/dans)、構成されるという事実が指示されている。目の前にある現在性を捉えること、それは過去から直線的に今を捉えようとするのではなく、過去と現在の累積から演算される数歩先の可能世界から現在に立ち戻っていく志向性を意味する。換言すれば、それはあらゆる還元主義に抗い、つねに現在を近い未来から先取りしようとする動きである。現在の脱領土化、そして再領土化。

無論、プロ・モダンという概念が議論されうるとして、それは依然、巨視的な、つまり曖昧で、現実から乖離しがちな抽象度を持つことに変わりはない。つまり、それはモダニズムとポスト・モダニズムに対する皮肉にしかなり